

曼珠沙華

彼岸花ともよばれるこの花が、群落をなして鉄道沿いの畦道あぜにおびただしく咲いていた、南紀の旅のことを思い出す。佐藤春夫氏の「望郷五月歌」にある、「南国の五月晴れこそゆたかなれ」といった感じとはおのずから異なった、初秋の澄明な光に溢れた日であった。車窓をかすめる、燃え立つような真紅の帯状の群落のあざやかな印象は、今も眼前によみがえってくる。

秋の彼岸の声をきくころになると、もうそろそろ曼珠沙華まんじゆしゆけが姿をあらわすのでないかと、心待ちするのが、いつのころからか、わたくしの慣わしになったことに気づく。

こうした心の習慣にこた応えて、季節をたがえず、毎年きまって咲く場所に、勢いよく頭をもたげてくる。その紅筆のようなつぼみの風情は、妖艶と評するにふさわしい。妖艶といえ、俳諧歳時記を見ると、この花に、「妖凄あせい」という評語を与えている。死人花・幽霊花・狐花などという俗称も持っているこの花は、どこか妖精めく凄さを発散しているのであろう。してみれば、ほころびそめたつぼみに妖艶を感じるのも、けっして不自然ではない。

死人花・幽霊花などとよばれるのは、この花の姿や色などによるのであろうが、秋彼岸会あきべんかいのころ、故人をしのぶおのずからな人心に、この花が、なにかを切実に語りかけてくるような感じを与えることも、やはりその理由となっているのではなからうか。辞書によると、曼珠沙華は、梵語 *manjusaka* の音訳で、もともと天上に咲く架空の花をいう、とある。いづれは仏典とともに将来されたことばにちがいないから、死者や靈魂に関係のある俗称の生まれたのは、この辺にも若干のかかわりがあるかもしれない。

わが家の南側の垣根を距てて、古い屋敷跡があり、その片隅の古井戸につづく荒地に、その群落がある。ことしは、天候のせいか、花茎ののぞくのが、例年より一、二日おくれた感じであるが、それでも彼岸明けまでには、満開期を迎えた。たとい、おくれればせにもせよ、秋のお彼岸を忘れず、姿を見せたこの花に、いじらしさというよりも、なにか執念のようなものを感じる。これは、その季節になれば、芽を出し花をひらく植物のすべてに共通する、生命のおのずからないとなみで、事新しくいうまでもないことであろうが、曼珠沙華にかぎって、執念という語を用いるのがふさわしいような気がする。

近年とくにこのように感ずるのは、地上の汚濁に対する地底の亡者の怨念おんねんが、憤怒おんぬの炎に燃え立つ姿を、そこに幻覚するからであるかもしれない。

(四五・一一)